つまなみ

VOL. 12
2011年5月20日発行

CONTENTS

p1 …… 新しい校章
p2 …… 附属のあした　附属横浜中学校同窓会会長　吉田 守人
p3 …… 日本のリーダーたれ　横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校 校長　蝶間林 利男
p4-5 …… 私と附属　附属横浜中学校元副校長　河地 安彦
p6-7 …… その一瞬のために　第61期生　伊藤 早織
p8 …… “不揃い”であればこそ附中　第15期生　千葉 景子
p9 …… 故岡野金之助先生の附属中へのご寄付の報告　第15期生　伊東 通
p10-11 … 進化形高校「光陵」の取組み　神奈川県立光陵高等学校 校長　鈴木 俊裕
…… 光陵生から附中生に望むこと　第61期生　山田 哲也
p12…… 同窓会ホームページの近況　第32期生　中臣 紀代

同窓会
横浜国立大学教育人間科学部
附属横浜中学校
同窓会
〒 232-0061
横浜市南区大岡 2-31-3
☎ 742-2281
URL：http://www.fuchu.sakura.ne.jp/

新しい校章（from 岡野先生）

好文木：附属中のシンボル［梅］

出来ました！　同窓会旗

附属のあした

横浜国立大学教育人間科学部
附属横浜中学校同窓会会長
吉田　守人

平成二十三年度の通常総会が六月十九日に執り行われます。私が前任の中西七代目同窓会会長から会長職を引き継いでから、約二年が経とうとしています。この年には、高木［前］校長から蝶間林［現］校長へと変わった年でした。そしてこの二年で附属横浜中学校も少しずつ変化を遂げてきています。横浜国大の学校法人化に伴う予算の縮減化や平成二十四年四月からの光陵高校との中高一貫教育の開始に伴う人材の配置換え等があります。そのためか我が同窓会の役割も以前にも増して大きくなってきています。附属中学校の評議委員となり、後方支援としてPTA・後援会・同窓会が三位一体になって支援するようになったからだと思います。

去年から附属横浜中学校への同窓会からの寄贈品は、パソコンから書籍に変わりました。今年も書籍百十五冊が贈呈されました。これにより図書室の充実化に向けて前進していくと思います。

わたしは第六十一期生と六十二期生を同窓生として迎えました。それと同時に彼らの保護者の皆様との交流を通して、附属横浜中学校を今よりももっと良い環境の中で育ってほしいと思うようになりました。言葉に表せないものが、心の中から湧いてくるような感じです。

第六十三期生から中高一貫教育の実行により、光陵高校に約四十名もの生徒を送り込むことになっています。第六十一期生、六十二期生の光陵生が彼らを暖かく迎えることと思いますが、附属横浜中学校で培った教育の成果がどのように表れてくるのか楽しみです。私が光陵高校に入学したとき、附属横浜中学校から光陵高校に入学した生徒は約六十名でした。その当時と同じような現象が現れるのかは分かりませんが、必ず明るい方向に向かって光陵高校の未来は開かれることを確信しています。

ここでは中高一貫の話しではありますが、附属の歴史を振り返って考えてみると、小中高大一貫教育の構図が見えてきます。横浜国大は優秀な人材を求めているわけですから、将来には光陵高校から優秀な人材を確保できることに期待していることと思います。私の時代には、横浜国大の教育学部に同期の女子生徒が多く入学し、優秀な教員へと育っていきました。また工学部もたいへんな人気があり、多くの同期生が大手企業に就職しています。

わが同窓生は、多岐にわたりその実力を発揮していて、この社会で活躍をしています。ホームページに案内を出しているように、自営業・医療関係そして教育関係の仕事に従事されている方が多いようです。

同窓会は幹事会を年十回開いて、同窓生のためにできることは何か、先輩・後輩の絆を太くするにはどうしたらよいかといつも考えています。平成二十二年度は入学式・卒業式・体育祭などの学校行事や学校評議委員会や後援会行事などに参加したのは、年二十三回を数えました。また平成二十二年十一月には「附属横浜中学校同窓会旗」を製作しました。皆さんに貸し出しますので活用していただきたいと思います。一月の成人式の祝宴に五十七期生が使用したところ、たいへん好評だったようです。通常総会にお披露目しますのでご期待下さい。

同窓生の皆さん、「やまなみ十二号」にはいろいろな思いをいっぱい詰めて作りました。今の附属横浜中学校と同窓会を知っていただければ幸いです。

これからの同窓会活動にできるだけ多く参加していただき、情報をお寄せくださるようよろしくお願いいたします。

校舎発祥の碑

「日本」のリーダーたれ！

横浜国立大学教育人間科学部
附属横浜中学校 校長
蝶間林　利男

可憐な梅の花が校舎をほのぼのとした雰囲気にしてくれている今日この頃ですが皆様ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。いつも附属横浜中学校への絶大なるサポートをいただき、心から感謝申し上げます。

本校第六十二期生百三十四名は三月五日（土）に卒業式を終えて四月から晴れて高校生となります。附属で学んだ知識、探究心、問題解決力、行動力、を活かして大いに活躍して欲しいものです。

『日本のリーダーたれ！』と私が彼らに話し、期待しているところです。

日経「私の履歴書」に連載されている建築家の安藤忠雄さん（一九四一年生まれ）を読みました。彼は大阪の工業高校を出て独学で建築を勉強し、一九八七年（四十六歳）にはアメリカ東部の名門校イェール大学、一九八九年にはハーバード大学に客員教授として迎えられ、一九九七年からは東京大学工学部の教授として迎えられた異色の先生です。彼は養子先の祖母に『うそをいうな』、『約束をまもれ』、『人に迷惑をかけるな』と厳しく育てられ、好きな建築への気持ちを持ち続けて〝世界の安藤〟として開花しました。現在も自分を育ててくれた関西にとどまり、日本、世界を飛び回っています。五十名を超えるスタッフと多くの若者とともに納得のいくまで議論し、よりよい生活空間を求めてより高レベルの建築を目指している姿はいつも輝いています。二〇一〇年には文化勲章を受章されました。

人は思春期に入り、自分の適性は何か？　適職（天職）は何か？　を求めて自問自答して悩み、努力していくわけですが「好きなこと」で仕事ができればこんな楽しいことはありません。大リーグのイチロー選手やプロゴルファーの石川遼選手はそのタイプですが反面並み並みならぬ努力も感じられますね。でも好きなことに出会えれば人は頑張れると思います。時間の経つのも忘れてやってしまうものです。辛いのは好きでないことを義務でやろうとするからです。自分のおかれている環境と状況を考慮して「好きになってしまえ」ばよいわけです。それに加えて他者のためになるなら！（共生・共助の精神）も大切です。自分のバリヤーを外して柔らかい頭脳を持ったらなんと楽しいことでしょう。『辛い時は神様がお前を試しているんだ』という亡き親父の言葉は今でも忘れません。素敵な人々との出会い・言葉は人を磨いて、大きくしてくれます。

人の命には限りがあり、運もありますが生かすも殺すも自分次第です。「いのちはその人の持っている時間！」と聖路加看護大学の日野原先生は言っておられましたがまさに時間を大切に使うということは命を磨き、輝かせているのだと思います。日常の何気ない態度や何気ない言葉は自分や他者に勇気を与える一方、傷つけてしまうものだと感じています。『言語活動の充実』を謳っている附属横浜中学からバランスの取れた素晴らしい後輩が巣立っていくことを願ってやみません。

私と附属

附属横浜中学校元副校長
河地 安彦

一、戦前・戦後の学校時代

私は福島に生まれ最初入学したのは福島師範の附属小であった。二学期の終わりに父の日銀本店への異動により一家で東京中野へ転居、「野方第五小学校」へ転入。東北弁にひけ目を感じたのか級友に笑われたのか、その後の三年余の記憶が全く無い。

四年の終わりから急に記憶が明瞭になり、五～六年担任の佐藤先生と相性が良かったのか活躍できた。作文指導に熱心な先生のお蔭で「学校の防空訓練」の題名で中央公論「冬の読本」に掲載されたことも記憶に残る。

●五中時代：昭和十七年府立五中（現都立小石川中等教育学校＝六年制）に入学。

太平洋戦争開戦の翌年のこと。五中は大正時代、初代校長伊藤長七先生が、イギリスのイートン校を範としてできた学校で、生徒はジェントルマンとして扱われ暴力は一切無かった。戦時中は鉄拳制裁が横行していたので他校に比して際立っていた。制服は背広、校技はサッカー（一九四二年東京代表）理科の実験校で「開拓・創作」を旗印に大いに勉強もした。中三の後半から軍需工場で昼夜勤務に従事。原爆投下により敗戦。中四の夏から勉学の回復に必死に努力した。しかし食糧難、激しいインフレ、物不足の苦しい生活であった。

●東京高等師範学校時代：戦後初の入学試験。戦時中の勉強不足、四年卒、食糧難の毎日ではうまくいくはずもなかった。旧制の一高は不合格。戦時中に父親を亡くしていたので、大学（旧制）進学は無理で、学校はできるだけ早く終わらせるが母の意向だった。

東京高等師範学校に運良く合格、入学できたが食糧難で秋まで休校。文科一部は修身・公民科なので哲学、倫理学などの学習にドイツ語は必須、休みの間に独学で基礎はマスターした。

いざ始まってみると大部分の級友が、私より二～三歳上、十歳以上もいた。年でなめられまいと酒、煙草を始める。今で言えば高二の年だが、旧制では中学より上の学校に入れば天下御免であった。さらに勉強は上野の図書館に通って進めた。暖房など無かった時代、冷えが原因か痔を悪くし高熱が続き敗血症となった。死亡率一〇〇％、ただしペニシリンがあれば助かる。まだ市販されていず進駐軍出入りの薬屋から入手。助けられた。

この時代、授業は焼け残った校舎、校庭で行われ、紙不足、発行図書も少なく、購入もままならず大変だった。有志で硬式テニス部をつくり、校庭の一部に勝手にコートを作ったりできた時代でおもしろい、楽しい時代でもあった。

専門の勉強はまじめに努力したが教職は好きでなかった。空き時間には専ら英・独・仏の単位を友人とともにとったのが、今では懐かしい思い出の一つになっている。

二、附属時代

私が附属に来るようになったのは全くの偶然だった。級友が附属と県立高校両方を受け、県立高校に行ってしまった。「附属の方で怒っている。河地君行ってくれないか」と担任から声がかかり出向いてきた。級友の身代わりとしてやって来たことになる。

●初見参

入学式は小中合同、立野の本校舎講堂で行われた。新任の先生は河地（中の社会科）間辺（小の図工）遠藤（小の音楽、後の間辺夫人）の三名、どんな挨拶をしたか覚えていない。拍手は中学側で盛大だった。

担任は三年B組、教室は本校舎の三階、港が見え遠くに房総半島を眺められる明るい美しい風景はすばらしかった。村上先生（数学、二年先輩）のご好意で、先生が主として男子、私は女子をみることになった。

この時私は満二十歳余、受持った生徒は弟妹のような感じだった。私は旧制で卒業したので男女共学は経験がなかったので新鮮な印象をもった。

この三Bと隣の三Aが、附中の二期生で極めて優秀な一団であった。教育実習でみてきた教育大附属生と同じくらい優秀だった。

また私の母校五中は、当時一中、四中、五中といわれ（旧制一高の合格者数ランク付け）進学有名校だったが、これと比しても優れた能力を持っていると確信した。

新しい教科の社会科は、部分的には高度な内容を含んでいたが皆よく学習し、私も学習効果をあげるため情熱をこめ全力を傾注して授業を進めることができた。

進学時になり都立有名校に全員合格、日吉の慶應高校に男子の三割近くが合格し面接官を驚かせたという。勿論有名県立高校にも進学した。当時附属は五日制、特に学校で受験勉強をしたわけではなかったが、目覚しい成果を上げ附属の評価を高めた。

初めての卒業式は充実した二期生との別れでもあった。「仰げば尊し」の歌が胸にしみた。附属の教師としてがんばろうという心積もりは、二期生との出会いが大きかった。

●部活動の思い出

バレー部、テニス部

二期生につづいて三期生を受持ったが、検診で結核と診断され、暫く休んだ。過労が原因だった。幸い新薬パス、ストレプトマイシンと気胸の併用で四～五年かけて治った。

したがって部活動を本格的に始めたのは、十期生（創立十周年で校旗・校歌ができた頃）あたりからだったと思う。

部活動はバレー部（九人制）十五期前後が最盛期だった。この頃横浜市の男子で最強のチームが聖光学園であった。何とか一勝をと猛練習の結果、一セット取れるところまで頑張ったのが思い出深い。このメンバーは勉強もできて心強かった。

昭和四十七年（一九七二）テニス部。テニス部を担当していた井田倉先生の都合で私が引き受けることになり、副校長になるまで担当。テニス部は専用コートがなく準備が大変で能率も悪く、硬球ではバンドが不規則になる。専用コートは弘明寺校舎移転とともに三面使用できたが、テニス部は強くならない。施設がよくなれば勉強ができ運動部が強くなるわけでもない。立野時代、ぼろ校舎の狭い運動場でも成果を上げた。要は人の問題といえそうだ。

●学校行事

夏季集落は、二期生のころは全校生徒が参加した宿泊学習。米持参で箱根へ出かけた。

夏季集落の中身は山歩き、飯盒炊飯。よく歩いた。箱根の大部分は歩き終えた。

昭和四十三年清里の寮を利用した時、岩石芸術と称し河原の周囲の岩石にペンキで主として動物の絵を描かせた。これが問題となって職員が後から消しに行ったが消しきれず、最後は業者に消させた。痕は暫く残り委員として慎重さが足りなく後悔の残る思い出だ。

修学旅行は関西方面、二期生は往復夜行列車利用、片道十時間くらいだった。お米持参。一日目、見学が終わって宿に到着となったら予約が取れていない。京都から大津へ移動した。

修学旅行の一日を小グループの自由見学とする提案は、二十三期の時にしたが受け入れられず二十七期から実施した。実施日は緊張した一日だったが全員無事帰着。ほっとし満足できた。

遠足は春、秋二回日帰りで行われたが、大失敗というより大心配したのが鋸山遠足だった。全校生が久里浜から往復船の予定で出かけ、往きは良いよい帰りは怖いとなった。

天候が変わり海が荒れ接岸に時間がかかり、船は上下に大揺れ、生徒の多くが船酔いで苦しむ中、船員が船から落ち助けられた。一時は生徒かと肝を冷やした。帰港時間が大幅に遅れ、父兄は心配を増大し騒動となった。私が初めて立案した遠足だった。生徒にもしものことがあったら生きて帰らぬ覚悟だった。この後、校外学習、行事等で船を利用する計画は認めないことになり、今日まで守られている。

●校外での活動

昭和四十八年国大附属で初めて文部省主催の海外教育事情視察団員となってブラジル、アルゼンチンを主訪問国として、帰途ヨーロッパを回り帰国した。「百聞は一見に如かず」を体験。

この後母を亡くし、家内が病気で倒れた。私の校外での仕事が超忙しくなった時でもある。

文部省から「学習指導要領」の作成協力者に依頼され、さらに「学習指導要領指導書」の作成「学力達成度調査」に参加、協力。十年余文部省へ出かけ多くの方にご指導を賜った。

この他「新しい社会」公民教科書の編集に参加、NHK「中学生の勉強室」を四年間担当。その他参考書、教師用図書など原稿書きに追われた。発病五年後に再発した家内は昭和五十六年秋に「癌研」で亡くなった。公私に忙しさに追われ充分な看護ができず悔やまれた。

昭和五十八年高木先生の後、附属五代目の副校長になり外部の仕事は断り仕事に専念した。

昭和六十二年から平成二年まで大韓民国「釜山日本人学校」校長を委嘱され、異国文化との交流、相互理解、在外教育施設の問題等を学び、国際感覚を身につけることができた。

●同窓会

同窓会の組織が完成したのは、卒業生全員の名簿完成を契機としてだった。教頭の依頼を受け私が昭和四十三年「学校要覧」を初めて完成。この機に「同窓会名簿」も作っておこうと作業を始めた。そこへ強力な助っ人として現れたのが十六期の木野正則さんだった。当時学芸大から慶應へ進学していた。彼が持参した学芸大附属の名簿の様式を借用、名簿作りに励んだ。時は高度経済成長時代。住所の動きが速く不明者の住所が確定できない。電話で確かめることが多かったので学校の電話はOKをとった。遅くなると軽く食事、家での電話等は自費負担。不明者を極力少なくし大気堂印刷に回した。印刷費は教頭からお借りした。後日お返しする約束だが名簿が思うように売れないときは自腹を切る覚悟。

初代新井会長以降歴代会長、役員、幹事の皆さんのご尽力で今日の盛んな同窓会がある。

同窓生はこのことに感謝し、できることはして、ぜひ積極的に協力して欲しいものである。

満開の桜の下、教え子とともに（前庭にて）
同窓会会長 吉田守人　河地安彦　編集委員長 伊東 通

その一瞬のために

第六十一期生　伊藤　早織

ブラバン now! (62～64 期)

附属横浜中学校には七個の運動部、五個の文化部の計十二個の部活動があり、生徒達は積極的に生き生きと活動しています。その中でも特に活発に活動しているのが、吹奏楽部です。

現在部員は六十二期十二名（男子二名）、六十三期十四名、六十四期二十三名（男子一名）の計四十九名います。

私も吹奏楽部に所属しており、トランペットを担当していました。部員のほとんどは楽器未経験者であり、譜面が読めない生徒もいます。ですから、楽器の持ち方から教えています。私もトランペットを吹いた事はなかったので、始めは全く吹けませんでしたが、先輩方のご指導のおかげで少しずつ吹けるようになっていきました。また、楽器、吹奏楽、そして部活が大好きになりました。しかし、いつまでも頼っているばかりでは成長が遅くなりますし、先輩方にも迷惑をかけてしまいます。そこで、もっと高音を出せるようになりたいなど、自分で磨きたい技術、つまり課題を見つけて教則本などを活用して調べる事もありました。高校生になった今では特に、自分で考えて練習していくことが大切になってきているので、経験が生かされています。

また、高校の部活動で得た、練習方法や集団行動のコツのようなもの等は中学校に練習に行って、伝えることができればと思っています。他中学校と異なり、学校の決まりで平日週三日と休日のみしか練習することはできませんが、効果的な練習方法を考えながら、皆一生懸命練習しています。

私のことについて多く述べてきましたが、ここで同窓会と吹奏楽部の関わりについて、触れたいと思います。吹奏楽部で使われている楽器の一部は同窓会からの寄付金三百万円程から購入したものだそうです。また、交流は古く、過去には同窓会総会での演奏を何度も行ったそうです。今後さらに同窓会との交流を深めていけたら良いなと思います。

それ以外にも様々な場面で演奏を行っています。第十一回横浜吹奏楽コンクールB部門では銀賞を受賞しました。また、コンクール以外にも、新入生オリエンテーション、学芸祭での演奏、クイーンズサークル吹奏楽演奏会や帆船日本丸演奏会への参加、光陵高校学芸音楽祭での高校生との合同演奏など、多くの行事で演奏させていただいています。そして、毎年三月に一年間の集大成として定期演奏会を行っています。

「吹奏楽は楽しい！」と最も感じられる瞬間は、何といっても日々の合奏、そして良い演奏会を部員全員で作り上げることができたときだと思います。始めは中々納得の行く響きを作ることができなくとも、何度も練習を重ねていくことで、美しいハーモニーや揃ったフレーズを奏でられたときの嬉しさはたまりません。

最後に、現在副部長の「六十二期　甲斐千遥さん」に吹奏楽部のPRをしていただきました。

「FY吹奏楽部は、平日の週三回と休日に活動しています。主に平日は個人やパートでの練習、休日は合奏をしています。

吹奏楽部の練習はとても大変です。特に休日は十時～十七時までのハードな練習。

でもみんな音楽、そしてこの部活が大好きなので真剣な表情で練習しています。

また、部員どうしの仲が良く休憩時間などは和気あいあいとした楽しい雰囲気です。先輩方も皆優しく、フレンドリーな人ばかりです。

今の目標は、人の心に響くような音楽を作ることです。一人ひとりが勝手に音を出すだけでは音楽になりません。皆で息を合わせて、人に感動を与えられるような音楽を演奏したいです。皆で音がそろった時の楽しさと嬉しさは格別です。」

さて、いよいよ夏の吹奏楽コンクールが近付き、練習に益々熱が入ってくる時期となります。今日も、合奏を行っているレクチャールームからは、本番のその一瞬のために、練習して奏でられるハーモニーが聴こえてくることでしょう。

この記事を読んで、少しでも附属横浜中学校吹奏楽部のこと知っていただくことや、吹奏楽に興味を持っていただくことができましたら幸いです。演奏会の折にはぜひ足を運んでみてください。部員一同お待ちしていると思います。最後になりましたが、日頃からご支援を頂いてます先生方、地域の方々、保護者の方々など、多くの方にお礼申し上げます。

〝不揃い〟であればこそ附中

第十五期生　千葉 景子

私が附中に入学したのは昭和三十六年、今から半世紀前のことになる。

初めての電車（と言っても市電）通学に心を躍らせ、牧場の牛に驚きながら立野の坂を上って行ったことが昨日のことのように思い出される。

以来五十年、高校、大学に進学、卒業後何とか弁護士の仕事を得、さらには国会議員として国政に関わり、野党暮らしで終わる予定が政権交代により法務大臣の職に就くことになろうとは、人生先はわからない。附中の同期生はもちろん、周囲の人々にとっても予想だにしない事態だったのではないだろうか。にもかかわらず、附中関係者の皆様には温かい励ましをいただき、力強い後押しをいただいたことは、私にとって大きな支えであったことに心から感謝の気持ちでいっぱいである。

このような道を歩んできた現在、私が自分自身誇りにできることは、どんな仕事や立場、肩書であろうが、〝強い力におもねることをしない〟〝自分と異質なもの、社会の中で弱い立場に置かれている者を差別しない〟行動をしてきたことだ。所詮人間の社会、一人で生きているわけではない。多様な人間がそれぞれの力を出し合い、支えあっているのだから、自分もできる限りの力を出して役に立つことができれば何よりと思い、頑張ってきた。振り返ってみるとこの原点は附中に見つけることができるように思う。

私が附中を選択した理由は記憶の中で必ずしも定かではない。他の選択肢がなかった訳では決してないと思うが、私はやけに附中にこだわったらしい。後に、家族からも、恩師からも、私の附中への執心ぶりを聞くことがあった。何か閃くものがあったのだろうか……？

附中の三年間は時代背景もあったと思うが、自由でのびのびした楽しいものであった。何がそのような気風を作り出していたのだろうか。

先ず、附中生（当時は全校で三百名程度）は、みんなが〝不揃い〟の粒揃いだったことだ。

一部だけが不揃いなのではない。みんな不揃いなのだ。だからお互い一つの形に揃えようがない。相互に「いろんなヤツがいるものだ」と受け止め、各人、自分なりの形で成長することになったのではないか。その意味で、中学生の割には自立性があり大人っぽかったように思う。この不揃い達を大きな気持ちで見守り続けた先生方も凄いものだった。不揃い達もその後仕事や各分野で活躍、現在ではそろそろリタイヤ期に突入しているが、会えば附中当時のまま。だが違うのは不揃いのオジさんオバさんとなっていることか。

さて、先生方も同じく〝不揃い〟の粒揃い。考え方もバラバラ。よく言えばそれぞれのスタイルを持っておられたということであろうか。教えられる側もそれで困ることもなく涼しい顔。でも、先生方は教師としての情熱と、自らの教科に誇りを持っておられた。当時は全然わからなかったが、後に、各分野の草分け的存在であったり、第一人者であったり、教育の場のみならず地域のリーダー的存在になっておられたり……etc。改めて驚く反面、妙に納得することにもなった。私たちはそんな先生方を敬愛し、親しみを込めてニックネームで呼んでいたものであった。それは現在に至るまで変わることはない、この間、亡くなられた先生方もおられさびしく感じるところも大ではあるが、皆の心の中に生き続けておられるはずだ。

添田定夫先生の最後の作品（千葉景子像）

この生徒と先生方の関係も附中ならではだった。不揃いで教師然としない教師、不揃いで中学生らしからぬ一端の振る舞いをする生徒。これでは荒れた学校になってしまいそうだが違う。先生方の学ぶ者に対する信頼、生徒の師たる人への尊敬、それが土台にしっかり存在していたからだ。附中にはそんな豊かな人間関係が満ちていた。私が何故かこだわって選択した附中。

〝不揃いの教師たち〟

〝不揃いの生徒たち〟

それらが生み出した素敵な附中ハーモニー。

それらが学び合って形成された自由で個性豊かな人間たち。

附中は私にとって、多分みんなの心の原点として生き続けるだろう。

故岡野金之助先生の附属中へのご寄付の報告

第十五期生　伊東 通

演壇及び司会者台と取り付けられた青海波

校舎正面上部に取り付けられた青海波

四年前に亡くなられた岡野金之助先生（教え子の皆さんにはオカキンの方がわかり易い？）には、生前から附属中に寄付したい旨を、私たち野球部ＯＢに託されておられました。

そこで、私と十六期の宮澤廣幸氏が附属中の米澤副校長先生と一年間協議を重ねた結果、改めて附属中の正式の校章となった青海波（襟章で皆さんにはお馴染みだと思います）を校舎正面上部と体育館の緞帳上部及び演壇及び司会者台に取り付けたいとのことでしたので、寄付することになりました。それらがやっと出来上がり去る平成二十一年七月十七日金曜日に附属中の体育館で贈呈式が行われ、私と宮澤氏が出席しました。目録贈呈は宮澤氏、オカキンの思い出を主にした挨拶は伊東が行いました。次に示すのはその折の話の概要です。

故岡野金之助先生（私たち教え子はオカキンと呼んでいました。無論、ご本人の前でではありませんが）は昭和二十八年九月から昭和五十八年三月まで附属中の教官として、四期生から三十四期生に英語を教えておられました。オカキンの授業は独特で、英語より人生論を教わったとは少なからぬ卒業生の言ではあります。又その間ずっと野球部の顧問をされていました。オカキンがバッティングピッチャーをされている姿を覚えている卒業生は多いはずです。ここにいる宮澤君は優秀なキャッチャーだったと弟から聞いています。

ところで附属小学校から中学校に入学してまず気がついたのはその自由な校風でした。生徒を大人扱いするというか任せるという雰囲気に感動したことを覚えています。中でもオカキンは生徒をジェントルマンやレディーとして扱ったことが大変印象に残っています。

無論、オカキンは大変怖い先生ではあったのですが、生徒には不思議に人気がありました。特に女生徒には。しかし、体育祭の練習の時や朝会のときは本当に恐かったです。〝きをつけえー〟という大きな声が今でも耳に残っています。その瞬間、皆、これ以上ないくらい緊張しました。また、生徒のお金が無くなった時などは別の意味で恐かった。〝附属の生徒にあるまじきことである……〟と涙を流しながら悲憤慷慨するのです。

岡野先生が亡くなられてから野球部のＯＢ達でよく話し合ったのですが、附属中にはノブレスオブリージュ（将来リーダーたる者にはそれなりのプライドと責任感と行動が要求される）という教育理念が問わず語らずのうちにあったのではないか、そしてその体現者の一人がオカキンではなかったかということがあります。

“Play hard.　Do your best for the team!”

フェアプレイ、スポーツマンシップなどオカキンの教えは無意識のうちに私達ＯＢの行動指針になっていることは確かです。

オカキンは在職中も、又退職されてからもずっと、附属中が、附属中の生徒や卒業生のことが好きで好きでたまらなかったのだと思います。今日ここにやっと岡野先生のご遺志を実現することが出来、私も宮澤君もほっとしております。皆さんもどうか附属中生としてより良い世界の実現を目指し、プライドと責任ある行動とをとられることを希望してやみません。

校章：青海波（せいがいは）

進化形高校「光陵」の取組み

神奈川県立光陵高等学校
校長　鈴木　俊裕

光陵高校は、学校を取り巻く社会環境の多様な変化や、これからの社会で生きて行くうえで必要な能力を身につけ、柔軟に対応できる生徒の育成に努めるとともに、創立以来培われてきた変わらぬ教育理念である「ゆたかな教養と、徳性の涵養につとめ、心身ともにねばり強い青年を育成すること」を第一に、「挑戦する心」「己に打ち勝ち、努力する心」「社会に貢献する心」「人を思いやる謙虚な気持ち」「人に感謝する気持ち」など、豊かな人間性を身につける取組みを行っているところです。

平成二十四年度から、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校との連携型中高一貫校として、附属中学校の生徒、約四十名を上限として入学して来る予定です。現在彼らの入学に備え、着々と準備を進めているところです。

連携校をふまえ、光陵高校が進めている主な取組みをご紹介したいと思います。

1　連携型中高一貫校として横浜国大の教育力の活用 ―「考える力」の育成 ―リテラシーの育成―

これは、横浜国大および附属横浜中学校の教育力を活用して、主体的に自らの将来を切り開く意欲、知識・態度や能力を育てることによって「知識基盤社会」に必要な能力の育成を図る取組みです。

さらに、勉強だけで終わらない取組みです。試験が目に見える学力と呼ぶならば、目には見えない学力もあります。学校行事や部活動から得る経験は、授業とはまた違った得がたいものです。行事や部活動を行うことにより、同じ目的意識を持った集団としての努力に裏打ちされた、達成感や連帯感、協調性、他者の存在、相手への思いやりやコミュニケーション能力の育成等、これからの社会で生きて行くうえで必要な事を学ぶ、人間形成に欠かすことのできないものを培うのです。本校では「人間力」の育成と呼び、教育実践を行っています。

2　「生きる力」―キャリア教育の推進―

自分の生涯を見すえ、自分らしさを探求し、目的意識をはっきりさせて、大学の次にある社会や将来を、明確に見通す力を育てていく取組みです。本校では、それぞれが目指す道を見つけるためにKU（光陵ユニバース「総合的な学習の時間」）を中心に、主体的に自らの将来を切り開く意欲、知識・態度や能力を育てることによって「知識基盤社会」に必要な能力の育成を進めています。さらに社会や職業の理解を深めるために、体験的・実践的な教育活動を行い、生涯をとおして社会的・職業的自立に必要な「就業力」のある人づくりを進めています。具体的には、卒業生によるキャリアガイダンスや大学生の進路懇談会、大学からの出前授業、進路相談会、ボランティア活動などを行っています。

Yes We Can　光陵祭

光陵生から附中生に望むこと

第六十一期生
山田　哲也

今回、僕が紹介するのは附中との中高連携が来年から始まる光陵高校についてです。

僕がその光陵高校に通い始めて一年になろうとしています。光陵高校に通う中で、光陵高校の様々な面を知ることになりました。光陵高校に入って最初の行事は体育祭でした。この体育祭には、応援団というものがあり、先輩から応援やダンスを教えてもらうのですが、その応援団の練習は昼休みが始ってからすぐ始まるのです。そんな気合を入れて取り組んだ体育祭はとても白熱したものになりました。体育祭当日の盛り上がりは今でも忘れられません。

他に盛り上がる行事と言ったら光陵祭だと思います。今回、僕は光陵祭実行委員として中学校にはなかった初めての文化祭に臨みました。文化祭の準備は大変でしたが、文化祭当日の達成感はとても大きかったです。

この体育祭と文化祭で、光陵高校と附属中は似ているところがあると感じました。それは行事を生徒に任せるということKU（光陵ユニバース）という総合の時間があることです。

行事を生徒に任せるということと、KUという授業をやることも光陵では人間力の育成を目指しているからです。行事を自分たちで作り上げるのはとても大変なことですが、考え行動することによって問題を解決する力を身につけることができると思います。それは将来につながってゆく力のはずです。

KUという総合学習の時間では、自分が興味を持ったことをいろいろなゼミに分かれて探求します。この授業は附中におけるTOFYの授業とよく似ています。自分の興味のあることを調べることは、今だけを見るのではなく先を見据えることなのだと思います。

そんな光陵高校と附中の連携は、「連携型中高一貫教育校」としての六年間を見通した教育によって附中の生徒一人一人の個性を生かし、特性を伸ばす「人間科学」を更に発展させていくのに適しているといえます。

この連携に伴って附中と光陵高校は、生徒会活動を中心とした部活動や学校行事等で交流が行われています。例えば附中で行われた学芸祭に光陵高校のわれわれ一年生がお邪魔して交流を深めました。逆に附中のTOFYで選ばれた生徒が光陵の文化祭の一画で「TOFY・KU発表会」を行い、TOFYの成果を発表しました。このような交流によって、連携を強固なものにするだけではなく、中学生にとって高校を知る良い機会になっているのではないでしょうか。

中高の連携によって附中の生徒が光陵高校の生徒と触れ合うことにより、少しでも将来像を大きく描くための指標になればいいなと感じています。

3　「学力向上進学重点校」―「確かな学力」と「高い志」―

目指すものは、生徒一人ひとりが希望する進路の第一希望を、決して下げさせることなく、実現させること。「確かな学力」の育成です。まず、第一は勉強することです。授業をしっかり受けることです。ただ本校では、学んだことを「活用」して課題の解決を図ること。さらに加えて未知の問題に主体的に取り組む活用・探究型の勉強の取組みを進めています。このことは、知識や技能のみを得ることで完結する学力スタイルから、各教科で学んだ知識や技能を「活用」し、課題解決を図る学習を重点に行っているということです。また、基礎学力の育成に向けて、補習・講習、勉強合宿、語学研修、教科別面談、実力テストなどを行っています。

鈴木俊裕 校長（光陵高等学校正門にて）

このように本校では、生徒一人ひとりが、自分自身を知り、自分の生涯を見すえて、それぞれが目指す、目標の実現を図り、高い志を持った次世代のリーダーを育成し、「確かな学力」と共に「豊かな人間性」を身につけるための教育実践を行っています。これは、附属中の「発見」「探求」をふまえ、「充実」「発展」というリテラシーの育成を行っているということでもあります。

最後になりますが、光陵高校に入学を考えている附属横浜中学校の生徒さんには、本校が目指す「人間力」をつける取組みを第一としていることを理解した上で、目的意識をしっかり持ってさまざまな取り組みにチャレンジすること。自分を知ることで将来につなげていくこと。コツコツと無骨でもいいから、真面目に汗をかくことをいとわない生徒さんに来ていただきたいと思っています。

本校での充実した、三年間の高校生活を送ることができるよう、また健やかな発展と大いなる活躍を期待してさらに様々な教育実践を行っていきますので、今後ともご支援ご協力のほどお願いいたします。

同窓会ホームページの近況

第三十二期生　中臣紀代

同窓会ＨＰ管理はこれまで代々、パソコンに詳しい理系の幹事が引き継いで参りましたが、近年適当な引き受け手も無いので、二年ほど前より横浜駅東口に在るＨＰ制作会社「株式会社ハマ企画」にＨＰのメンテナンスやデータ更新を委託することにしました。

まずは契約サーバー等これまでのウェブ環境の整備をお願いし、ＨＰの住所ともいうべきＵＲＬとメールアドレスを文末の通りに変更して頂きました。

その後千葉景子先輩が法務大臣に就任された折の寄稿、故岡野金之助先生からのご遺言で附中に頂いた寄贈品の話題等もタイムリーに掲載しました。その他同窓生が企画出演するイベント情報なども時時刻刻と掲載して参りました。

中でも力を入れて取り組んだプロジェクトは、「ドクターズリスト」の作成、ＨＰ掲載です。同窓生の医師が探せる一覧で、診療科目や連絡先が分かります。

住所と併記されている「地図」アイコンをクリックすると医院の地図が表示される仕組みです。お医者様探しの際にお役立て頂ければ幸いです。

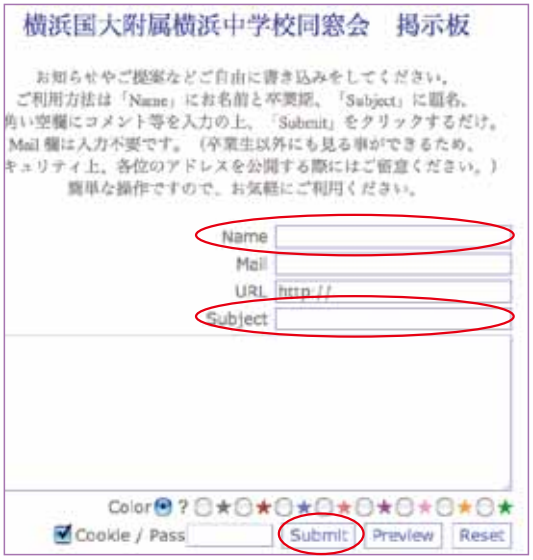
先日上の期の先輩方から「訃報」の欄を設ける要望を頂きました。幹事会にて検討の結果、ご葬儀の日程などは急を要する事柄なので、各自で自由に書き込むことのできる「掲示板」をご利用願おうということに相成りました。

まことに簡単な操作ですので、お気軽に書き込みをしてみてください。緊急連絡のみならず、提案に対するコメントやレスポンスを頂く楽しみもあります。また各位の期への内輪な連絡でも大歓迎です。同窓会の呼びかけなどにもご利用下さい。（但し携帯番号などを記載することの無きようご注意ください。）

今後は幹事会活動のご報告など、徐々に手を入れつつ、より充実したＨＰを目指したいと考えております。皆様のご提案ご要望などをメールにてどんどんお寄せ下さいますよう、宜しくお願い致します。

「掲示板」の使い方

① 同窓会のトップページ、「コミュニケーション」欄から「掲示板」へと進んでください。



② 「Name」欄にお名前と卒業期、「Subject」欄に題名、四角い大きな空欄にコメントや用件を入力の上、「Submit」をクリックするだけです。

③ ちなみにName欄下に「Mail」欄がありますが、入力不要です。同窓生以外でも見ることが出来るため、セキュリティ上、ご自身のアドレスは公開しないようにしてください。

同窓会ＨＰのURL：http://fuchu.sakura.ne.jp/
同窓会のe-mail：fydousoukai@gmail.com